

## 小鹿野歌舞伎における三番叟について (1) —その歴史的背景をさぐる—

Sanbasou in Ogano Kabuki (1)  
—Discovering it's historical background—

安倍 希美<sup>1</sup>

<sup>1</sup>北里大学 一般教育部

Maremi Abe<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Collage of Liberal Arts and Sciences, Kitasato University

1-15-1, Kitasato, Minami-ku, Sagamihara, Kanagawa, Japan 252-0373

キーワード：小鹿野歌舞伎，三番叟，歴史的背景，民俗芸能，秩父

Key words : Ogano Kabuki, Sanbasou, Historical background, Folk performing arts, Chichibu

### 抄録

小鹿野歌舞伎には三番叟があり、明治期に興った「大和座」の型が伝えられているとのことであるが、上演する部会により演技が異なる。そこで、文献調査、現地調査により小鹿野歌舞伎三番叟の歴史的背景、現在の状況を調べた。その結果以下のことが判った。大和座は、興行では常態的に幕開けに三番叟を演じていた、他の地芝居で三番叟の指導もしていた等、歴史的に三番叟との関係が深かった。上飯田部会の三番叟は、世襲により100年以上、継続的な上演の歴史を有していた。他の部会では昭和の終盤から一時中断していたが、三枝健市氏の指導が契機となり平成に復活し、現在に至っている。三枝健市氏は「大和座」の家系の人物で、若い頃自ら三番叟を演じていた。大和座は音羽屋系統三代目に該当するが、江戸末期の初代音羽屋から三番叟を演じ、三番叟には型と自由裁量部分が存在していた。

### 1. はじめに

小鹿野町は秩父郡に属し、埼玉県の北西、群馬県との県境に位置する。日本の原風景ともいえる自然が残る貴重な場所であり（写真1）、神楽・獅子舞・太鼓等の民俗芸能が、日常生活に密着して存在している（写真2）。中でも特に地芝居の



写真1 小鹿野町 歌舞伎の里より両神山を望む



写真2 奈倉地区 大徳院での神楽と子ども達

小鹿野歌舞伎の保存と伝承に関しては、全国的に非常に高い評価を受けている。小鹿野歌舞伎は上飯田・小鹿野・津谷木・十六・奈倉・小森の6地域で、各神社の祭礼にて主に氏子において奉納される。この時は、屋台の両脇に芸座を上げ花道を

付けた特設の屋台舞台（写真3,4）や、常設の舞台（写真5）等を使用し、主に屋外で行われる。



a 日中は屋台を曳き回す b 芸座と花道を付ける



c 夕刻には張出屋台舞台が完成し歌舞伎の上演  
写真3 上町屋台舞台の作り方



写真4 上飯田屋台舞台での歌舞伎



写真5 木魂神社（お天狗様）の舞台は山の土

それぞれの地域に子ども歌舞伎があるが、地域を横断する小鹿野子ども歌舞伎もあり、現在小鹿野歌舞伎保存会は、奈倉と小森を賛助とし、他の

4部会と小鹿野子ども歌舞伎の5部会により構成されている（但し都合上賛助の2団体も以後部会と表記する）。大祭に加え11月の町の文化センターで開催される郷土芸能祭、他所での招待公演等もこなし、活発な活動が展開されている（写真6,7）。



写真6 紫陽花の中での津谷木子ども歌舞伎



写真7 大盛況の浅草奥山子ども歌舞伎まつり

## 2. 関心の源泉

小鹿野歌舞伎には三番叟があり、現在、奈倉以外の全ての部会、その他の公演で少なくとも年間11回は上演されている。奈倉は女歌舞伎で有名であるが、三番叟が上演されていない理由は、奈倉のお祭りは歌舞伎だけでなく、地元の文化祭的色彩を帯び（写真8）、全体の構成への配慮による。



写真8 奈倉のお祭りの開幕は幼児達の歌

埼玉県の地芝居はかつて少なくとも70もの団体があったが<sup>1)</sup>、現在まで継続して存在するのは、秩父市の正和会と小鹿野歌舞伎の2団体となり、毎回三番叟を上演するのは小鹿野歌舞伎である。

それは、かつて明治中期頃までは行われ、主に若い役者によって「揉みの段」を演じた、「番立」<sup>[2]</sup>の古式が引き継がれたものと思われる。役者は化粧を施し、頭には剣先烏帽子を足には白足袋を着用し(写真9)、「サンバ〜」の大きなかけ声と共に入場する。舞台の脇に控えた笛と太鼓によるほぼ60拍/秒の、のびやかな曲調で音楽が奏でられ、10分間程度の上演の中で、拝礼(写真10)、四隅での軽快な足拍子と共に、両腕を広げ脚を上げる。



写真9 三番叟の化粧と装束(左: 女兒, 右: 成人)



写真10 三番叟の動作(左: 拝礼, 右: 礼)

その歴史、人物、内容、伝承の形態、については、毎年11月に開催される小鹿野町郷土芸能祭のプログラム集にその解説文が1頁配分されているものが、現在唯一のまとまった資料といえる。ここでは小鹿野歌舞伎における三番叟は、幕開きの儀式として幕を開けた状態で始まり、舞台を酒・塩・米で清め四方固めを行い、大入りと祭りと舞台の安全・五穀豊穰等を祈念するもので、かつて長若村にあった地芝居の座元「大和座」の型が伝

えられている、等と記されている<sup>[3]</sup>。

小鹿野歌舞伎の三番叟は、上演する部会が異なると、入場や礼の仕方、手足の使い方、移動の仕方、最後の決めのポーズ等随所に細かな違いがある。そして伴奏曲は共通であるにも拘らず、全体の印象も大きく異なる。これらの事に心を魅かれ、その要因や「大和座」の型を知りたいと思ったが、先の解説頁ではそれらの理由までは記載されない。

### 3. 目的と方法

小鹿野歌舞伎三番叟の、動作の多様性、多彩な印象を放つ要因、そして「大和座」の型を探るため、まずはその歴史的背景、現在の状況、等を理解する必要があると思われ、本研究に着手した。まだ全容が解明された訳ではないが、ここでは現時点で把握できた、小鹿野歌舞伎三番叟の歴史的背景について報告する。

方法は文献調査、現地調査、映像調査を平成26年12月から開始した。文献調査は、小鹿野歌舞伎や秩父地方の歌舞伎、関連する人物の歴史を調べる際に、三番叟に関する記述が無いかに注視することにより実施した。歌舞伎そのものにおいて直接手に取れる資料が少なく、当時の人の回顧録や古老への聞き取りを纏めたものも対象とした。

現地調査は、三番叟の上演は全て見て、可能な限り稽古やリハーサルを見せてもらい(写真11)、その映像を写真とビデオカメラにて記録した。またその折に対面形式により、指導者や演者、関係者から、三番叟の歴史・伝承者・動作等について聞き取り調査を行なった。また秩父地方に存在する、歌舞伎関係者の碑文も調査した。

映像調査は、平成26年12月以前の映像を、可能な範囲で見せてもらった。



写真11 十六部会は先輩も交えて稽古に励む

## 4. 小鹿野歌舞伎史 音羽屋・大和座・そして歌舞伎保存会

### 4.1. 小鹿野歌舞伎史

本論を展開するに必要な小鹿野歌舞伎の歴史を記す。秩父地方の歌舞伎研究に初めて本格的に着手したのは四方田である。四方田<sup>[4]</sup>は秩父地方における歌舞伎の起爆剤となったのは、坂東彦五郎（天保5年没）と捉え「当時秩父郡下吉田村井上（現吉田町井上）に坂東彦五郎という名優がいた。江戸に出て坂東の家元に師事し、技を磨いて郷里に帰り、門弟を仕立て一座を組織し、全関東及信越方面を巡業した。」と記し、師事先は坂東三津五郎ではないか、と考えていた。

その門弟は昭和33年より音羽屋と喜熨屋の二派が主張される<sup>[5]</sup>。「大和座」は音羽屋の系統で、初代の音羽屋彦五郎は小鹿野町三島の根岸勇三郎（慶応3年没65歳）で、少年を集めて「勇佐座」を作った<sup>[6]</sup>。その根拠は不明であるが、「地芝居についても、幕末に秩父の坂東彦五郎（根岸勇三郎）が奥多野に来て教えているし、以下略。」とあり<sup>[7]</sup>、興行だけではなく地芝居の師匠も務めていた模様である。没した慶応3年は西暦では1867年に該当し、2017年で没後150年となる。

その後、小鹿野町の三枝巳之吉(1832-1883)が二代目を襲名、明治初年に<sup>[6]</sup>住地名の般若村天王に由来した「天王座」を組織し<sup>[4]</sup>、その妻ムツは衣装方を務め常に一座に随行した<sup>[5]</sup>。坂東花之助、坂東音十郎、助高屋東蔵、中村九十郎等、勇佐座の多くの役者が天王座にいた<sup>[6]</sup>。

二代目は明治16年に51歳で没し<sup>[5]</sup>、同年に坂東大和(1856-1923)が「大和座」を興した<sup>[6]</sup>。「大和座」の座名は、坂東大和の屋号「大和屋」に由来したものだという<sup>[8]</sup>。大和座の大半の役者は天王座員であった<sup>[4]</sup>。その後巳之吉の孫三枝増蔵(1879-1960)が明治32年22歳と成長して三代目を襲名し、大正5年に「大和座」の座元となった<sup>[5]</sup>。

「大和座」は、明治5~6年頃に片岡十美之助らが結成した「和泉座」とともに、秩父地方の歌舞伎興行の全勢期を築いた<sup>[4]</sup>。

しかし次第に、映画や戦争の影響で「大和座」の活動も限定的になり<sup>[4]</sup>、昭和初年に活動を休止し<sup>[6]</sup>、三代目は「高砂座」「梅松座」等にも合流したが<sup>[8]</sup>、昭和24年3月7日に引退興行を行った<sup>[4]</sup>。引退しても、大祭奉納の地芝居の師匠として演技指導は続け、昭和30年80歳の天寿を全うした<sup>[8]</sup>。

そのような中、黒沢助男氏は、大祭以外にも慰問や公演等を行うべく、久保敬氏、田嶋恒夫氏等、元大和座の数名と昭和40年5月22日に「新大和座」を発足させた<sup>[9]</sup>。そして昭和48年11月3日に「新大和座」と各部会が集結して「小鹿野歌舞伎保存会」が結成され<sup>[9]</sup>、今日に至っている。

### 4.2. 音羽屋

音羽屋は根岸勇三郎、三枝巳之吉、三枝増蔵の三代に亘り継承されている。音羽屋の意味はまだ解釈の途中であるが、この3名とも江戸から大正時代の間の記録に、その姓名や芸名が記されており、ここでそれらを特に示しておく。

初代根岸勇三郎については、小鹿野町上町行事記録の文久二年七月に「諏訪祭礼として下町には花火致し申候、上一式は（中略）屋台を出しかざり置き勇三芝居、上州松之助参り大当たりに御座候、（以下略）」と記録されている<sup>[10]</sup>。田中千弥日記<sup>[11]</sup>においては、「明治16年10月14日、名広め興行をした助高屋東蔵は旧小がの勇三「坂東彦五郎」の弟子にて、」と紹介されている。田中千弥（せんや）は旧秩父郡下吉田村田中の出身で、貴布弥神社祠掌・棕神社副司官等を歴任し、嘉永3年から明治31年までの49年間にわたる日記は、秩父地方の歴史資料として高い価値を受けている。更に、大正14年に初版が発行された秩父郡誌<sup>[12]</sup>には、「坂東彦五郎 小鹿野町の人。本名を根岸勇三郎と云ふ。幼より演劇を好み、其の技に妙を得、下吉田村出身の俳優坂東彦五郎の門生となり、やがて其の名を襲ぐ。時恰も幕末演劇流行の際なりしかば、同輩門弟を糾合し其の座頭として武蔵・上野・下野地方に名を顯はしたり。慶應三年十一月没す。年六十五。辭世あり。曰く 送らるゝ足どり揃ふ霜の路」と記載されている。その辞世が刻された碑に「音羽屋」と記されている。

二代目三枝巳之吉については、田中千弥日記<sup>[11]</sup>に「明治6年5月9日に般若村三枝巳之吉」、「同年6月1日般若芝居者三枝巳之吉」として、その本名が登場する。

三代目三枝増蔵は、明治39年10月26・27日に、尾田蒔村での演劇興行において、郡役所に提出する起業届けの俳優鑑札写に、その芸名坂東彦五郎と本名三枝増蔵が記されている。三代目は継承したもののまだ大和座の座元ではなかったが、俳優惣代の任にあったことが判る<sup>[13]</sup>。

## 5. 大和座と三番叟の関係を示す記録

明治時代の春まつりを記した文章に、「春日町の屋台芝居はほとんどいつでも般若の大和座が受持ち、それに町内若衆の幾人かが加わって踊った。上町では時に違った座を頼んで上演した。」<sup>[10]</sup>「ドドドン、ドドドンと三番叟の始まる太鼓を競って打ち鳴らす。上町、春日町ともほとんど同時に出来上がるのが普通だった。」<sup>[10]</sup>とある。

児玉町稲沢の稲聚神社での芝居は、「明治34年まで上演していた、小鹿野町の大和座所属の役者（ハナノスケ・皆野町金沢）が来て教えた、幕開けは三番叟を必ず演じた」旨の記載がある<sup>[11]</sup>。ハナノスケとは大和の実兄坂東花之助（1849-1920）と思われる。但し出生地は旧原谷村黒谷である。花之助は既出の通り勇佐座の時代からの音羽屋の役者で、時おり上京して九代目団十郎や五代目歌右衛門の振りをみては、仲間達に教えたという<sup>[5]</sup>。晩年もよく地芝居の稽古にでかけ、中略、芝居が好きだったのである<sup>[8]</sup>、という人柄であった。

明治後半期から大正初期に至る大和座の旅興行の様子を、昭和27年4月に浅見清一郎氏が坂東大五郎丈から聞いた話から<sup>[8]</sup>「初日の三番叟を踏む役者には立元（筆者註：勧進元）から紙一帖、白たびにぞうり各一足、さらし三尺、酒一升が祝儀として出されたが、近頃では何ほどの祝儀が包まれば良いほうだという。」坂東大五郎は大和座の役者で、津谷木部会の最初の師匠であったが<sup>[9]</sup>、歌舞伎の衰退を憂慮し、昭和6年に地役者を統合して「梅松座」（昭和27年12月が最後<sup>[8]</sup>）を組織し<sup>[5]</sup>、昭和32年に89歳で長逝した人物である<sup>[9]</sup>。



写真12 扇を持つ猪野氏と背後の紙製神酒口

この話は、三番叟は清めの意味もあるため「毎年お祭りの都度、行事（筆者註：世話役）に白足

袋・草履・扇を購入してもらう。酒壺に挿す飾り（筆者註：神酒口又は熨斗口と思われる）は保存会では金属製であるが、当方では模造紙で毎回新しく自作する。」と後出する猪野氏による話と合致する点が多い（写真12）。さらし三尺は六尺禪よりも袴着用時に相応しい三尺禪のためと思われる。

三枝増蔵は三代目音羽屋彦五郎を襲名した明治32年式三番の黒木尉も披露した<sup>[8]</sup>。天王の三枝増蔵が三代目音羽屋彦五郎を引退したのは、昭和24年のことであった。略。その時の上演外題と配役は次の如きものであった。（1）翁三番叟 三代目坂東（音羽屋）彦五郎 以下略<sup>[5]</sup>。

日本武神社改修記念誌の中、十六部会初代部長堀口豊氏<sup>[14]</sup>の「昭和初期の忘れ残りの記」と題した手記に「夕暮れ近くなると子供達はだんだん少なくなり、大人達やお年寄りが多くなりはじまると、間もなく地芝居大和座一門の歌舞伎が始まる。先ず若手俳優の三枝健市さんの三番叟が幕開けとなる。」という一文がある。堀口氏は戦後の荒廃した人心融和のため、昭和21年3月5日日本武神社（通称十六様）大祭（写真13）から地元氏子による歌舞伎上演を企画推進した人物である<sup>[14]</sup>。



写真13 現在は日中からも十六歌舞伎が行われる

津谷木部会では、昭和25年5月8日、木魂神社の新舞台の柿落しの記念写真において、津谷木部会前師匠の井上哲男氏が、三番叟の衣装を身にまとい、大勢の人に囲まれ舞台中央に立っている<sup>[3]</sup>。井上哲男氏は、上記の昭和21年3月の日本武神社大祭において、17歳で初舞台を踏み、三代目、坂東彦四郎（彦五郎の弟）、二代目坂東音十郎、坂東大五郎等、大和座の名優達を師匠とし、厳しく芸を教わり<sup>[15]</sup>、それを後人に伝えた人物である<sup>[16]</sup>。

井上夫人の話では、「この時に三番叟の役を決め、師匠を務めたのは増蔵さん（三代目坂東彦五郎）であった。」とのことである。小澤幸男部会長は「明

確に記憶しているわけではないが、井上師匠の後も何人か演じた。」と語る。そして小島登一氏が昭和時代の最後の演者であつたらしく、氏の三番叟を直接見た人は現在も多くいる。

これらより、大和座（後の梅松座等も含む）は明治期より昭和20年代まで、常態的に幕開けに三番叟を演じていたと確認され、明治期は、他所で三番叟の指導もしていた、等、三番叟との関係が深かったことが窺える。

その後「新大和座」は上飯田・津谷木・十六地区等の各団体と合同で、昭和46年11月3日に「第一回郷土芸能大会」を開催し好評を博したが<sup>[9]</sup>、そこでは「新大和座」が舌出三番叟を上演している<sup>[17]</sup>。保存会が結成された2年後、昭和50年5月18日に、埼玉県指定無形文化財に指定され、その記念公演の幕開けに田嶋恒夫氏による三番叟が上演された<sup>[9]</sup>。娘の田嶋文子氏の話では、「父の三番叟は、柴崎さん達の三番叟（筆者註：後出する「小鹿野」型）と似ていて、3回の鳥飛びを如何に高く飛ぶか、高く飛んだように見せられるか、に最大の努力を費やしていた。」とのことであつた。

（筆者註：現在鳥飛びを3回実施するのは津谷木部会のみである）現在へと繋がる新しい幕開けを迎えたのであるが、以後暫く三番叟の定期的な上演記録が見受けられなくなる。

## 6. 三枝健市氏による三番叟の伝授とその広がり

そのような中、再び三番叟の上演が定常的になったが、それは三枝健市氏（1917-2012）の指導によるものであつた。三枝氏は5歳から15歳までは子役を、後には「音羽屋」二代（天王座）・三代（大和座）とその衣装を所有・管理した三枝家の当主を、また小鹿野歌舞伎保存会では衣装方の重責を務めた<sup>[16]</sup>。そして、先に記した通り、かつて自身が三番叟を演じた人物である。三枝家の住地は日本武神社の氏子、保存会の十六部会の区域で、敷地内に衣装や小道具を保管する収蔵庫がある。

### 6.1. 十六部会への伝授と広がり

平成8年3月5日、日本武神社神楽殿落成披露公演を兼ねた大祭では、三枝健市氏（当時79歳）（写真14）を師匠とした三番叟を、現在師匠を務める栗原国男氏が演じた。笛・太鼓・鼓より演奏がなされていたが、笛の演奏は三枝氏であつた。



写真14 直会の三番叟のお酒を勧める三枝健市氏

当時のプログラムには、「十六若連では神楽殿の新築を祝って、二十数年ぶりに舞うことになりました。」と記載されていた<sup>[18]</sup>。20年前で昭和51年にあたる。戦後の昭和21年から昭和50年までの30年間のことは、現在調査中である。



写真15 平成8年復活の三番叟を舞う栗原氏

栗原氏の三番叟は、現在の三番叟と比べると、四隅の清め方は酒・塩・米個別に丁寧に計3周回り、75拍/秒と曲調も速く動作も俊敏で、両腕と左脚を瞬時に開く決めのポーズは、背中に描かれた鶴が一気に飛び立つようにも感じられる（写真15）。ここでは便宜上この三番叟を「十六型」とする。栗原氏は2年後の平成10年3月21日、拝殿・社務所竣工かつ大祭日程変更の時にも、この「十六型」を上演した。

地域住民の利便性向上を目的とした道路拡張のため、一部敷地の提供を伴い、平成5年の計画立案から丸5年を経て、日本武神社の全ての改修工

事が無事終了した。平成10年4月19日その竣工祝賀会の神事に先立ち、十六神楽は「児屋根之命」を、十六歌舞伎は坂本千夏氏が「三番叟」を奉納した<sup>[19]</sup>。坂本氏は「三枝氏より三番叟の役をもらい、3月の栗原氏の三番叟を研究した。3月の大祭終了後、1ヶ月の間に2~3回程、三枝氏より直接三番叟の指導を受けた。」と話した。その時三枝氏は「これは大和座の型だよ」と言い、足の動作を中心に指導がなされたそうである。

その後坂本氏は、大祭の日程変更が再度行なわれた平成19年と、その2年後平成21年にも演じた(写真16)。但し平成19年はもう三枝氏は笛を吹いておらず、平成21年の演技は平成8年の「十六型」とは異なったので、平成19年も同様であったと思われる。この頃の状況は現在確認中である。



写真16 平成21年坂本千夏氏の三番叟

そして平成25年、現在の指導者達により、子ども二人三番叟「十六嫩花の三番叟」が創作され、以後毎年上演され続けている。丁寧な四方の清め方は平成8年と同様、新しいながらも古式を再現した特色ある三番叟と言える(写真17)。



写真17 十六嫩花の三番叟 酒での清めは櫛を使用

なお小鹿野歌舞伎ではないが、秩父歌舞伎正和会も「30年前まで各地の祭礼で上演しましたが、以後途絶えていたものを昨年11月に復活したものです。」とのナレーションと共に、平成11年4月13日第17回定期公演で三番叟を上演し(写真18)、ここにも影響を与えたと考えられる。



写真18 平成11年秩父歌舞伎正和会の三番叟

## 6.2. 春日町石川竹次氏に対する伝授

「平成12年、春日町屋台の床、板の間改修の折り、久しぶりに三枝健市さんのご指導を受け、三番叟を踏むことができた。平成18年9月、「第17回全国地芝居サミット in おがの」が開催され、春日町屋台張り出し舞台を飾りつけ、再度三番叟を踏むことになり、多くの方々に観ていただくことができた。」とある<sup>[20]</sup>。平成12年は石川氏84歳、三枝氏は83歳であった。最頁創刊号には、小鹿野春祭り春日町屋台にて石川竹次三番叟を舞うとして、氏の写真が掲載されている<sup>[21]</sup>。平成18年卒寿の石川氏の堂々たる三番叟(写真19)は、人々に強い感銘を与えた。メリハリのある氏の足拍子には、三番叟の経験の豊富さを感じさせられた。この石川氏の三番叟の型の分類は現在検討中である。



写真19 石川竹次氏 卒寿の三番叟

### 6.3. 小鹿野部会柴崎氏らに対する伝授と伝搬

平成12年の秋、郷土芸能祭の楽屋で、三枝氏の「誰か三番叟を習わないかなあ」との呟きに、小鹿野部会の柴崎好一氏、小松恒夫氏、森川文行氏、高橋利安氏の4氏が、三番叟の演技並びに笛・太鼓の演奏を、三枝氏の自宅にて本人より10回程度教わった。その時三枝氏は、演技に関しては足の動きを重点的に指導したそうである。そして稽古の合間に「大和座の型の三番叟」のみならず「これは天王座でもやっていた、天王正調の三番叟だよ。」とも話したそうである。小松氏は「そのような由緒正しい三番叟を教わるのだと、身の引き締まる思いがした。」と当時のことを語った。

そして皆で演奏と演技を修得し、皆で演技を教え平成13年4月の春祭り（小鹿神社例大祭）上町屋台で復活させた<sup>[22]</sup>。復活初代の演者は滝田義行氏であった。柴崎氏らの指導により、平成13年よりは更に、子ども歌舞伎と郷土芸能祭において、平成22年より春日町の屋台においても、継続的に上演されることとなった<sup>[3]</sup>。現在上町屋台では上町子ども歌舞伎（写真20）が、春日町屋台では春日町青年部（写真21, 22）が演じている。



写真20 上町子ども歌舞伎の三番叟



写真21 春日町青年部の三番叟



写真22 春日町青年部の稽古には仲間が揃う

平成20年には小森部会においても、やはり歌舞伎の幕開けに三番叟をと、中村照充氏が柴崎氏の指導を受け、10月の小森諏訪神社の祭礼で復活上演した<sup>[23]</sup>。その後加藤氏らによっても演じられた。



写真23 小森諏訪神社での子ども二人三番叟

平成26年からは中山君と逸見君による子ども二人三番叟（写真23）となり、現在に至っている。

のびやかな笛の音によく適合した振りが続く一方、足を外側にくの字様に素早く上下し続ける動作（写真24）は見所の一つとなり、緩急の妙が味わえる。現在までの上演回数のはべ80回を超え、広く普及したこの三番叟を「小鹿野型」とする。また小森部会以外でも、状況に応じて二人三番叟（写真25）が演じられることがある。



写真 24 足に注目



写真 25 女子の二人三番叟

#### 6.4. 津谷木部会への広がり

以上のように、随所で三番叟の上演が復活されてきた気運を受け、津谷木部会でも平成 20 年 5 月 3 日、木魂神社例大祭にて田端克次氏により復活上演された<sup>[23]</sup> (写真 26)。当時のプログラムには、「舞台、役者の安全を願って久しぶりに三番叟」と記されていた<sup>[24]</sup>。田端氏は、「井上師匠と小島氏より、足の動きを重点的に教わった。」と話した。その後、平成 23 年からは津谷木子ども歌舞伎の田端祐也君、茂木俊樹君 (写真 27) に引き継がれる。



写真 26 田端克次氏の三番叟



写真 27 茂木俊樹君

木魂神社の別称「お天狗様」が、自由に時空を駆け巡り、永遠に再生していくイメージと、溢れる爽快感を感じる三番叟である。これを「津谷木型」とする。

#### 6.5. 十六部会への進行手順書・動作書の伝授

三枝氏は加齢と共に幾つかの病に侵され、徐々に体力が低下し、栗原国男氏や坂本千夏氏の話では、「平成 8・10 年当時で、すでに時々笛の演奏が

苦しそうな時があった。」とのことである。そのような理由で、ある時から笛の演奏を十六部会員の栗原幸男氏に委ねた。そして進行手順書・動作書があれば笛の演奏もしやすいであろうとの理由で、平成 16 年頃に笛の音とリンクさせた三番叟の手順書・動作書を、自筆にて 3 枚記し栗原幸男氏に託した。今回これが期せずして、大和座の型を探る重要な手掛かりとなる。また平成 19 年頃にも 1 枚の自筆動作図を十六部会に託し、十六部会では三番叟の図面、進行、笛の音と文字による動作の記述を、ワープロで 1 枚作成した。これら合計 5 枚の記載内容や三番叟における大和座の型等に関しては、次回に詳しく述べたい。

### 7. 猪野家の伝統ある三番叟

ここで猪野家の三番叟について述べる。上飯田地区では八幡神社の大祭（鉄砲祭）の折に「八井」という屋号を持つ猪野家の当主が、世襲により超然として三番叟を演じ続けている。拝礼時に実際に飲酒して自らを清め、扇を持って格調を保ち、脚を高く上げる (写真 28)。造り酒屋の当主ならではの三番叟で、これを「八井型」とする。小鹿野歌舞伎における三番叟で継続的な上演の歴史を有するのは、この猪野家の三番叟である。



写真 28 上飯田屋台舞台での「八井」の三番叟

現当主の知氏によると、「自分の芸歴は 30 年、父（勇氏）は 6～7 年、祖父（保氏）で 50 年程。それ以前で二代（甫氏、甫輔氏）が確認できる。」とのこと、最近の三代で昭和初期頃から 90 年弱の由緒が確認できる。また知氏によると「経験を積むということで、父に限らず叔父達は、若い頃祖父の代に数回演じている。」とのことである。

この「八井型」の起源を推測するには、黒沢<sup>[25]</sup>の記述が参考になる。「明治23年頃までは、坂東彦五郎こと浅井宇市（浅井三郎平氏の祖父）が熱心に指導して子供歌舞伎が盛んに行われた。その後、若連によって演じられたが、（以下中略）。八井は元造り酒屋だった。現在の家の裏に大きな酒蔵があり屋台はその中に格納してあった。お祭りになるとそこから曳き出し、八井の前で三番叟を舞った。それから若連歌舞伎の場合は八井の当主が三番叟を舞う事になり、今でも古い伝統をそのままに続けている。八井の当主は猪野勇氏であるが、ここ数年長男の知君が舞っている。この時八井から三本の酒が振舞われる。」（写真29）



a 振舞い酒のセット

b 盃には八井の屋号

c 酒を振舞う行事 d 三番お神酒を用意する行事  
写真29 「八井」の三番叟にはお酒が欠かせない

ここで登場した 坂東彦五郎こと浅井宇市は、「喜熨屋」七代目とされる人物<sup>[9]</sup>である。子供歌舞伎時代の三番叟の詳細は解らないが、これが現時点では、喜熨屋と三番叟の関係を示す唯一の記述ともなっている。上記が正しければ、明治24年頃から八井の三番叟が始まり、125年程にも亘る歴史を有し、保氏より前で40年弱ということになる。但し、猪野氏の実感とは少しかけ離れた印象があるとのことで、今後の検証が必要である。

猪野氏によると「芸の伝承・指導は親子間でなされるのではなく、師匠によりなされる。現在の師匠は柴崎好一氏、その前は黒沢助男・角助親子、田嶋恒夫氏、角助氏以前の師匠は不明。」とのことである。現在から角助氏までいずれも喜熨屋ではなく「大和座」系の人物である。

造り酒屋「八井」の当主が演じる、「大人」の三番叟である。喜熨屋が存在していたとしても、実績豊富な「大和座」に、衣装も含め振り付け指導を依頼したと考える事は自然である。仮に明治24年から「八井型」が始まったとすると、当時は黒沢角助氏、音羽屋三代目ともに若年であったので、坂東大五郎（推定年齢23歳）、坂東大和（同35歳）や花之助（同43歳）等の「大和座」の然るべき人物が引き受けたと推測する。

しかしそこにおいて浅井宇市の知識と経験は、存分に発揮されたと思われる。猪野氏と上飯田部会の強矢徳夫師匠は「孫の浅井三郎平氏は、歌舞伎や大祭のしきたり（写真30）に大変詳しくあった。」「三郎平氏の長女も同様である。」と語る。



写真30 屋台を留置く場所にもしきたりがある

## 8. 三枝健市氏の小鹿野歌舞伎三番叟指導の背景

猪野氏によると「我が家の衣装は三枝氏が特別に用意し自宅で管理している。祖父の衣装は健市氏の手描きで、上演時には田嶋恒夫氏の鼓と共に、笛を演奏して頂いていた。」そうである。三枝氏は、上飯田だけでなく他の部会でもまた歌舞伎の幕開けに三番叟を、と考えていたことは、想像に難くない。自らが崇敬する地元の日本武神社の改修工事は、何よりの好機であったと思われる。これにより2年間で計3回の三番叟、三三番が可能となり、またその改修記念誌のみにより、かつて三枝氏が三番叟の演者であったことが判明する。改修記念誌には時折「ご神徳」という言葉が表記されているが、これは正に十六様のご神徳かのようなものである。そして平成12年初頭の春日町石川氏への伝授も、大層意義深く取り組んだと思われる。

その頃の小鹿野町や小鹿野歌舞伎を取り巻く社会的環境は、平成 10 年に歌舞伎のまちづくりが「潤いと活気のあるまちづくり 自治大臣表彰」受賞、平成 11 年に小鹿野歌舞伎保存会が「県知事表彰（文化功労）」受賞<sup>13)</sup>、「小鹿野歌舞伎後援会」発足<sup>12)</sup>等、と正に活気に満ちていた。このような時なら、定常的な三番叟の上演も可能なのではないか、それもできればかつての自分のように若年期の役者によって、と思ったのではないか。

そこで平成 12 年に、子ども歌舞伎の指導にも熱心に取り組んでいた柴崎氏達に三番叟を伝授し、次世代育成を委託したと考えられる。また体力的にこれが最後の機会と自覚していたとも思われる。そして平成 16 年 86 歳、19 年 89 歳となった頃、紙面に進行や動作を記しておけば、この先も長く残るのではないかと、十六部会員に永続性を委託したのであろう。

以後、三枝氏の体力は低下の一途を辿り、三番叟の指導歴は見受けられなくなる。平成 21 年 2 月 7 日三枝氏 91 歳の時に、小鹿野町で「第 12 回全国小さくても輝く自治体フォーラム」が開催された。そこに平均年齢 82 歳の「寿座」が結成され、最高齢 92 歳石川竹次氏と共に出席し、「絵本太功記」の皐月役を演じたが、その時はすでに足腰が衰え車椅子での参加であった<sup>14)</sup>。

## 9. 人と時代をつなぐ三番叟

明治・大正・昭和と演じ続けられてきた天王座・大和座・小鹿野歌舞伎の三番叟である。上飯田部会以外では、昭和後期に途絶えかけたが、三枝健市氏の努力により、平成の時代に蘇った。現在は現在の指導者達が熱心に、子どもや青少年達に教えており、次の時代・世代に繋がっていくのであろう。三番叟は人と時代をつなぐ、小鹿野歌舞伎の貴重な財産といえる。

今回、吉田井上の坂東彦五郎、音羽屋初代～三代、中村九十郎、坂東大五郎、片岡十美之助等に関する碑文を調査したが、そこに三番叟に関連すると思われた一つの碑があった。それは小鹿野町の文化財にも指定されている、初代音羽屋根岸勇三郎の碑（写真 31）である。その台座は風化が始まり文字の判読が困難になりかけているが、寄進連名として 18 名、うち 2 名は根岸家関係、弟子 40 名程の多くの芸名が記されている。そしてその台座の上の碑には「躍叟勇傳居士」と刻されてい

る（写真 32）。歌舞伎劇団の長であった氏を象徴する、究極の字数制限の中に、敢えて「叟」の一文字を入れた先人の思いを斟酌すると、解釈の一つとして「勢いよく跳び上がる（鳥飛び）元気な三番叟をおどり伝えた勇三師匠」が浮上する。



写真 31 初代音羽屋の碑



写真 32 「躍叟勇傳」の文字

中村九十郎の碑の冒頭部分には「嘉永二年に秩父郡尾田蔭村に生まれ八歳で秩父俳優の祖坂東勇佐之門に入った」旨が刻されている。一例ではあるがこのような年齢の、少年にとって元気な跳躍、鳥飛び（写真 33）は、この上なく楽しく魅力的な運動であったに違いない。鳥飛びのある生き生きとした三番叟を、朗らかに教えてくれた勇三師匠の姿は、師匠の死後、師を偲ぶ弟子共通の強い思い出となっていたのではないか。

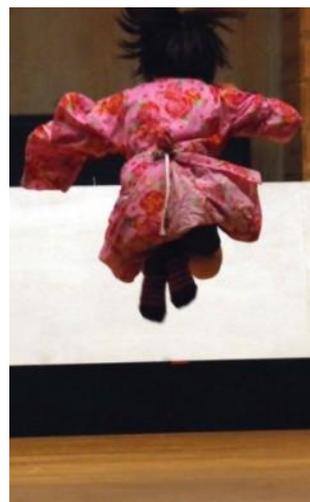


写真 33 鳥飛びの動作 (左:女児, 右:茂木君)

それ故に勇佐座の経験者のいた天王座・大和

座でも、三番叟が演じられ、ハナノスケは指導もしていたと考えられる。精査できる資料があれば、天王座・大和座の型を超えて、勇佐座まで貫く江戸時代からの「音羽屋」の型に辿り着く可能性を見出せる。しかし天王座に関するものは、衣装以外は2度の火事により焼失したそうで、また根岸家は、現在は歌舞伎への関与は無い。三代目の孫の代に相応する三枝健市氏が、晩年に三番叟の復活に傾注した姿勢、二代目の墓碑は初代が居た三島を向いて建墓されている（写真34）、これらは雄弁なる答えであるのかもしれない。



写真34 初代を偲ぶ二代目の墓碑 間には衣装取蔵庫

## 10. 紋章を読み解く

「躍叟勇傳居士」の上部には紋（写真35）も刻されており、それは三角形が8つ車輪様に揃った、千鹿野<sup>[26]</sup>の分類による目結紋の「中陰四つ目車」に相当すると思われる。根岸家によると「これは当方の家紋ではない」とのことで、この紋の意味が解釈できれば勇佐座の理解が増すことになる。

千鹿野<sup>[26]</sup>は「中陰四つ目車」の意味は記してはいないが、目結のなりたちを以下の様に紹介している。「目結とは小さな四角形の絞り染めの古称である。別名を鹿の子絞り、纈纈模様ともいった。



写真35 初代音羽屋の碑の上部にある紋章

『和訓栞』には「凡そ孔竅あるを目というは、此国のならわし也。目釘猪目などいう是也。而してこれを目結というは、布を括りて、あたかも目即ち孔の如く染めたるを以ってなり。今いう鹿の子絞りにして、上古これを纈纈という。和訓これをイフハタという。即ち結び機（ゆいはた）にして、括染の織物の義なり」。この模様を紋章化したものが目結紋である。

今回、十六部会長黒澤哲雄氏の厚意により、平成3年から21年までの十六様大祭時の歌舞伎プログラム<sup>[18]</sup>を閲覧することができた。そこでは平成21年の三番叟が、「大和座」の型が伝えられていると紹介され、平成16年から三番叟以外の演目についても「大和座」の型を後世に伝える」と紹介されていた。筆者は「大和座」の型は三番叟に限定された事かと思っていたが、そうではなかった。

とりあえず今まで調査してきたことから考察すると、この紋章は以下のように解釈される。

- 1) 通常用いられるところの四角形を半分にして三角形を使用した訳は、根岸勇三郎の三、三番叟の三、過去・現世・来世の三世の三、等に因む。
- 2) 目結を用いた理由は、同門一族で同じ型を作るため。しかし、括られてできた型があるからこそ、そこに進化していくための空白の自由裁量部分ができる。即ち不易と流行を示すため。また鹿の子と小鹿野をかけた意味もある。
- 3) 「中陰四つ目車」を選んだ理由は、中陰ではない単なる「四つ目車」よりも孔の部分の面積が増大し、型と孔のメリハリが明瞭となる<sup>[26]</sup>。不易と流行の境界の設け方の判断力を明確に示すため。

総合すると井上坂東彦五郎から継承した「型の根底」を捉える判断力を、小鹿野にて弟子に伝えた。その行為が車輪のように廻っていく、永続性を示す証のように思われる。三番叟はその判断力養成に最適であり象徴となる存在で、初代音羽屋はそこまでの指導をした師匠であったのかもしれない。これがその延長線上にある現在の小鹿野歌舞伎に、演技の異なる三番叟が存在し、多彩な魅力を放っている理由の一つであると考えられる。

## 11. 陰の支え

小鹿野歌舞伎保存会において、三枝健市氏の主要任務は衣装方であった<sup>[16]</sup>。高齢の三枝氏の負担軽減のために、お囃子を担当していた天沼紀典氏は、いつの頃からかその合間に着付けを手伝うよ

うになった<sup>[16][27]</sup>。また柴崎芳江氏らも、歌舞伎関係者としていつしか同様であった(写真36)。天沼氏は「これがなかなか難しく、いつも怒られたのですが、怒られた内容にとっても参考になる意見もあり、怒られて自分の力がついたと思います。」と記している<sup>[27]</sup>。柴崎氏も「着付けは役者の演技に大きな影響を与えるため、三枝氏は着付けに対して特別な信条があり、指導はとても厳しかった。」(写真37)「衣装を準備することも任されたが、演目毎に必要な衣装や保管位置等、全て三枝氏が記憶していた事が口伝により指導され、理解するのに苦労した。」と述べる。



写真36 三番叟の着付け 写真37 鎧も着付ける

そして柴崎氏は「衣装のことで三枝家を訪れる機会が増え、そこで目にしたのは、病身の三枝氏の世話をする家族の姿であった。」と語る。

十六様のご神徳のみならず、このような着付け方や家族の陰の支えに助けられ、三枝氏は晩年、最後の力の多くを三番叟の伝授に費やすことができた。音羽屋・大和座の後裔としての、天命を完遂したかの如くである。前述した寿座では、移動と台詞を黒子姿の長男の補助を受けながら、臯月役を見事に務めきった。5歳から子役を、そして幕開けの三番叟を演じ復活させた三枝健市氏、その長きに亘る歌舞伎人生の閉幕には、拍手喝采の花道が添えられた<sup>[16]</sup>。

## 12. 終わりに

ここに今まで調査した、小鹿野歌舞伎三番叟の歴史的背景について報告した。三番叟復活・継続に際して三枝健市氏の功績は、大きなものであった。しかしそれに応え、陰で支えた多くの人々の尽力があってこそその復活であった。歴史調査は現

在も続行中であるが、今回は三番叟の動作に焦点を絞った報告をしたいと考えている。

## 謝辞

小鹿野歌舞伎保存会堀口武治会長はじめ多くの会員の皆様、子ども歌舞伎役者の保護者の皆様、八幡神社大祭行事の皆様、春日町・中島青年部の皆様、には映像撮影・インタビュー・情報提供等で、小鹿野町教育委員会社会教育課山本正実課長(平成26・27年度当時)始め同課の皆様、須崎旅館・越後屋旅館・観光交流館の皆様、映像撮影の高岸友行氏、には情報・資料提供等で、根岸家・三枝家・猪野家の皆様、丸山巖氏・山口清文氏を始めとする多くの写真家の皆様、地芝居愛好家の松浦鳥夫氏、多くの小鹿野町民の皆様、には情報提供等で、大変お世話になりました。ここに深く御礼申し上げます。

## 引用文献

- [1]埼玉県教育委員会. 埼玉の地芝居. 埼玉県教育局文化財保護課文化財第一係. 1981, pp.22-76.
- [2]国立劇場調査養成部・芸能調査室. 歌舞伎の文献・7 芝居年中行事集. 1976, pp.35-189.
- [3]小鹿野町教育委員会社会教育課. 第43回小鹿野町郷土芸能祭プログラム. 2013, P.14, P.33.
- [4]四方田美男. 秩父歌舞伎史の研究. 武蔵野史談. 1953, 2(3,4), pp.122-130.
- [5]倉林正次. 芸能風土記. 埼玉県神社庁. 1963, pp.344-368.
- [6]秩父市教育委員会. 秩父史話. 1955, pp.228-231.
- [7]万場町誌編さん委員会. 万場町誌. 万場町. 1994, p.1289.
- [8]浅見清一郎. 秩父 祭りと民間信仰. 第2版, 有峰書店, 1970, pp.294-325.
- [9]小鹿野の歌舞伎芝居. 小鹿野町教育委員会・小鹿野歌舞伎保存会. 1975, pp.1-22.
- [10]小鹿野町誌編集委員会. 小鹿野町誌. 小鹿野町. 1976, pp.1033-1112.
- [11]大村進ほか. 田中千弥日記. 編集梶拓二. 埼玉新聞出版局, 1977, pp. 146-315.
- [12]秩父郡教育会. 埼玉県秩父郡誌. 復刻版, 臨川書店, 1987, p.261.(大正14年初版)
- [13]尾田蒔村誌編纂委員会. 尾田蒔村誌. 1992, pp. 567-568.

- [14]日本武神社建設委員会. 日本武神社改修記念誌. 1998, pp. 55-104.
- [15]小鹿野町役場秘書企画課. 小鹿野歌舞伎一幕千夜. 小鹿野町. あかまんま双書, 1995, p.76.
- [16]小鹿野歌舞伎後援会. 小鹿野歌舞伎写録. 2010, pp.70-105.
- [17] 小鹿野町教育委員会社会教育課. 第40回小鹿野町郷土芸能祭プログラム. 2010, p.36.
- [18]十六若連. 歌舞伎上演プログラム. 1991-2009.
- [19]日本武神社・日本武神社建設委員会. 日本武神社改修工事竣工祝賀会次第. 1998.
- [20]石川竹次. 歌舞伎のおかげで金比羅参り. 鬮貞小鹿野歌舞伎後援会報. 9号, 2009, pp. 2-3.
- [21]石川竹次. 「鬮貞」創刊に寄せて 鬮貞 小鹿野歌舞伎後援会報. 創刊号, 2000, p. 2.
- [22]小鹿野町教育委員会. 上町屋台復原修理工事報告書. 小鹿野町. 2015, p. 48.
- [23]小鹿野町教育委員会社会教育課. 第41回小鹿野町郷土芸能祭プログラム. 2008, p. 5.
- [24]津谷木有志若連. 歌舞伎上演プログラム. 2009.
- [25]黒沢登. 飯田八幡神社の鉄砲祭り. 埼玉民俗. 1992, 17, pp. 13-23.
- [26]千鹿野茂. 日本家紋総覧. 角川書店, 1993, pp. 1006-1025.
- [27]天沼紀典. 歌舞伎今昔物語～その3～裏方ばなし. 鬮貞小鹿野歌舞伎後援会報. 4号, 2003, p. 5.

---

### Abstract

---

Ogano Kabuki, a folk style of kabuki originating over 200 years ago in the village of Ogano in the Chichibu region of Saitama, opens with the Japanese traditional dance called, Sanbasou. This dance is thought to have adopted the basic 'kata' forms by Yamatoza, the performing group founded by Otowaya Bando Hikogoro III in the Meiji Period. Yamatoza enthusiastically taught Sanbasou dance to local people whenever they held village festivals. Today, however, the performing style of Sanbasou varies among the many regional group who perform it in Ogano Kabuki. In this paper, the author examines the historical background and the current performing styles of Sanbasou in Ogano Kabuki, as well as the strong connection between Yamatoza and Sanbasou, which she discovered from her research and visits to regions of Chichibu.

---

(受付日：2017年3月29日，受理日：2017年4月10日)



安倍 希美 (あべ まれみ)

現職：北里大学一般教育部准教授

お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了。

専門は動作学，身体教育学，発育発達学等の領域。2014年甲午歳総開帳の秩父札所巡りを契機に，秩父の雄大な自然，野趣的な民俗芸能文化，飾らない人々に魅せられる。現在はそれらと健康を融合させた研究を模索中。小鹿野歌舞伎三番叟の研究は，その幕開けの一つに位置する。